名古屋柳城短期大学
ちゃぺるにゅーす
第28号
2015年12月16日

民衆憲法に学ぶ

学長　新海英行

「戦後レジームからの脱却」が叫ばれて久しい。昨今再びそうした声が大きくなっているようだ。安保関連法による戦争（参加）への危機、有事における基本的人権の制約、マスコミへの介入・統制など、憲法が保障する基本的な原理（国民主権、基本的人権、平和主義）が崖ぶちに立たされているといえないだろうか。

11月3日は、日本国憲法の公布された日である。実はこの憲法は明治10年代の民権憲法に学んだ占領国軍総司令部（GHQ）が方向づけたものである。その意味で、民権の思想はいまの憲法に継承され、私たちの国のかたちや社会やくらしのあり方を定めている。そうした両者のつながりを知るためにも、民権結社による私擬憲法づくりの1例を紹介してみよう。

1968年、色川大吉氏（当時・東京経済大学）と同大ゼミ生たちには西多摩郡五日市の旧土豪・深沢家の久しく放置されていた土蔵から民権結社「五日市学芸講談会」による「日本帝国憲法草案」を発見した。色川氏はこれを民衆憲法と呼び、また五日市憲法草案と名づけた。自由民権運動の中で農民や士族を中心とする民権家によって創られた私擬憲法はすでに発見されたもので植木枝盛の憲法草案をはじめ90数種に及ぶが、国民の自由と権利の保障という自由民権の視点に立つならば五日市憲法草案は最もすぐれたものの一つと評価されている。

五日市憲法草案は全文204条から成る。その内訳は、第1篇国帝（41カ条）、第2篇公法（36カ条）、第3篇立法権（79カ条）、第4篇行政権（13カ条）、第5条司法権（35カ条）であり、しかも国民の自由と権利に関する条文が150条も含まれている。以下、いくつかの条文をあげてみよう。

第45条「日本国民ハ各自ノ権利自由ヲ達ス可シ、他ヨリ妨害ス可ラス、且国法之ヲ保護ス可シ」（国民の自由と権利。国の法律はこれを保護すべき。）

第47条「凡ソ日本国民ハ族籍位階ノ別ヲ問ハス法律上ノ前ニ対シテ平等ノ権利タル可シ」（身分、地位に関係なくすべての日本国民が平等の権利を持っている。）

題56条「凡ソ日本国民ハ何宗教タルヲ論セス之ヲ信仰スルハ各人ノ自由ニ任ス」（信教の自由）

第76条「子弟ノ教育ニ於テ其学科及び教授ハ自由ナルモノトス、然レドモ子弟小学ノ教育ハ父兄タル者ノ免ル可ラサル責任トス」（教育の自由は前提であり、親にとっては子どもの就学は免れない責任）

第77条「府県令ハ特別ノ国法ヲ以テ其綱領ヲ設定セラル可シ府県ノ自治ハ各地ノ風俗習例ニ因ルモノナルカ故ニ必ラス之ニ干渉妨害ス可ラス其権域ハ国会ト雖モ之ヲ侵ス可ラサルモノトス」（府県の自治は国会であっても干渉妨害できない。）

それでは、上述の憲法草案はどういう人々によってつくられたのか。ほとんどは地元の自作農、豪農、小学校教師などだった。例外が一人だけいた。仙台からやってきた千葉卓三郎である。千葉は、若くして戊辰戦争に加わり、薩長藩閥下、投獄され、学校にも行けず居場所を失うなど、辛酸をなめている。ギリシャ正教教会で受洗し、カトリック、メソジスト派と遍歴し、キリスト者としての生き方を探求する一方で、五日市の青年たちと民権結社・五日市学芸講談会を結成し、哲学、思想、政治、経済等（学術書から翻訳本に至るまで）の学習活動に取り組み、民衆憲法（私擬憲法）づくりへと収斂していった。千葉は、大日本帝国憲法とは真逆の、現憲法に近似した草案をまとめあげ、その直後肺結核のため僅か32歳で昇天した。五日市憲法草案には他の私擬憲法と比べて人間性の豊かさや敬虔の深さ→人権への想いの熱さを感ずるが、千葉のイエスへの信仰のゆえであろうか。あらためて民衆憲法に学びたい。

参考文献　色川大吉『明治の文化』『民衆憲法の創造』、伊藤始他『五日市憲法草案をつくった男・千葉卓三郎』等

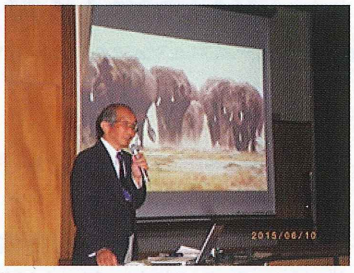
「合同礼拝特別企画から」

今年度、様々な企画を礼拝にドッキングさせてみました。

6月10日

「命のつながり
—サバンナの環境と野生動物の親子愛—」

宮嶋 英一氏（本学元就職課長、一般社団法人サバンナクラブ幹事）



長らく本学の就職課長として学生たちと一番近い位置から就職支援を行ってこられた宮嶋英一氏は、今は、環境問題への取り組みや野生動物の保護活動を行っておられ、アフリカのサバンナに生きる野生動物の素晴らしい写真が知られています。講演では、宮嶋氏がこれまでサバンナに関わってこられた活動のより一層深いところを語ってくださいました。サバンナの急激な環境変化と動物種の激減という問題です。

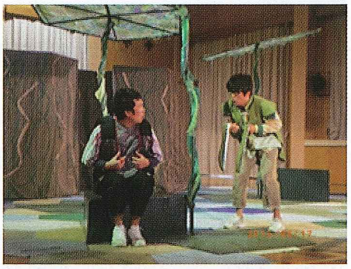
講演で印象に残ったのは、親から子へと、太古から受け継がれてきた命のつながりの中で、今の私たちは生きている、というメッセージでした。野生動物の母子や仲間のあいだに見られる深く細やかな愛情は、本能ではなく、自らが愛され育まれた経験を通じて学ぶものだと宮嶋氏は語りました。野生の動物たちは親から深く細やかな愛を学び、自分たちの子どもを愛情深く育てていくのだそうです。そうした1つ1つの懸命な命の営みを通じて、この地球の命の営みは受け継がれてきて、現在の地球にあふれる生命多様性がもたらされました。しかし、この生命多様性は今、大きな危機にさらされています。現代は、種が次々と絶滅する「第六次大量絶滅」の時代だそうです。その原因は自然環境の破壊を進める人間であると、宮嶋氏は指摘しました。

宮嶋氏は、保育者を目指す学生たちに、親子の愛情や命のつながりのすばらしさを伝えるとともに、未来の子ども達に豊かな環境をどうやって残していくかという問いかけを残してくださいました。深く考えさせられる時間となりました。（村田）

5月27日　6月17日

劇団うりんこ 観劇会

「いきもの生き方図鑑
—リサがトカゲになる日—」



毎週水曜日の礼拝時間は、授業の1コマ分の時間が与えられていて、礼拝とともに、建学の精神のもとに様々な集会や企画が開催されています。前期には、同窓会「のぞみの会」のプロデュースで、劇団うりんこによる観劇会が開かれました。同窓会会長の鎮籏さんからは、学生に向けて、「すばらしい職業を選ぼうとしている皆さんに、少しでもお役に立ちたいと思い、キリスト教センターのご支援を受けながら企画をしました。保育や介護にたずさわるには豊かな感受性や想像力を持つことが必要だと思います。柳城在学中に、このような企画を大いに活用して、自分自身を磨くきっかけにしてみて下さい」というメッセージが届きました。

実習や保育現場見学と重なったため、5月27日は一年生、6月17日は二年生のための礼拝と観劇会となりました。普段の半分の人数ですが、それだけ間近にプロの劇団の迫力ある上演を観ることができました。

わずか4人の劇団員が演じる世界がリアルに、ときにコミカルに迫ってきて、ぐいぐいと引き込まれていきました。小学生の子どもたちが虫に変身してしまうというファンタジックなストーリーですが、1人1人が互いに個性をぶつけ合いながらも共同し成長していく様子を見ながら、学生たちは自分自身を振り返るとともに、保育者の視点からも子どもたちの成長や変化を見つめていたようでした。演出や衣装、舞台セットなど、保育者の視点からも学ぶことの多い機会となったと思います。（村田）

9月30日

人形劇団「紙風船」による観劇会

大学礼拝の特別企画として、「愛実（あみ）の会」による人形劇を開催しました。劇団名は「紙風船」です。かわいらしい名前ですね。「愛実の会」は名古屋市港区にあるNPO法人で、重度の障がいをもつ方も安心して地域生活を送れるよう、他の団体と協力し様々なサポートを行なう団体です。詳しくはウェブサイトでチェックしてみて下さい。

今回、5名の方が車いすで参加されていましたが、障がいを持つ方が「お仕事」として人形劇を演じる団体は、日本では「愛実の会」だけだそうです。「でも、障がい者が演じる人形劇というふうには見て欲しくない」と語る代表の方の言葉が胸に響きました。

劇の題名は『ポンタとたっくん』で、タヌキと少年の友情をテーマにした作品です。「ネタばれ」はここでは避けますが、この劇の大きな特徴は、言葉のない人形劇であることです。映画で言えば無声映画。演技の一挙一動と音響だけから、人形たちの心の内（というか、演じている方々の熱いメッセージ）を読み取らなくてはなりません。ハイテク時代に生きる学生さんらには貴重な体験だったと思います。私もチャップリンの代表作である「街の灯」なんかを思い出しながら観劇させてもらいました（ただし、この映画は字幕付きですが）。

保育や福祉の世界に就職を希望する本学の多くの学生さんは、将来、子どもたちや高齢者、障がい者と向き合う中で、言葉だけがコミュニケーションの手段ではないことを思い知るはずで、口先だけの人にならないよう、日頃から行動や身体表現に磨きをかけておきたいですね。聖書も語っているとおりです。

イエスは言われた。「イザヤは、あなたたちのような偽善者のことを見事に預言したものだ。彼はこう書いている。『この民は口先ではわたしを敬うが、/その心はわたしから遠く離れている。』」（マルコによる福音書7:6）

人形劇の後は、劇団紙風船のテーマソング『風をください』を披露して頂き、サビの部分だけは全員で歌いました—。「何もしなきゃ何もできない/あきらめているだけじゃ/できることからできるだけでいい/歩きはじめたんだぁ」

解散後は、愛実の会の特設グッズコーナーで交流を深めました。たくさん売れたみたいでスタッフの皆さんは大喜び。人形たちも嬉しそうでした。

おわりに、観劇後に取った学生アンケートから三つだけをご紹介します—。「言葉がないぶん集中して自分の想像力を使ってストーリーを膨らませながら見れました。」「胸に響きました。うるっと涙が出ました。私にも当てはまるところがあり、感動しました。」「大事なことを思い出させていただくことができました。ありがとうございました。」（加藤）

キリスト教センターブログのご紹介

第27号でご紹介したブログが軌道にのり、「柳城」という文字を検索バーに入力しなくても「キリスト教センター」だけで上位にヒットするまでに成長しました。まったくアメイジング・グレイス（驚くべき主の恵み）です。これからも当センターの様々な活動を皆さんに楽しく配信できるよう努めますので、ぜひ「お気に入り/ブックマーク」にご登録をお願いします。（加藤）

10月14日
AHI講演会
「パキスタンでクリスチャンとして生きる」

10月14日(水)の大学礼拝では、現在AHI(アジア保健研修所)に留学中のズバイダ・シャミム・デワンさんのお話を聞く機会に恵まれました。デワンさんは、パキスタン出身の女性で、現在、NGO「世界的健康への取り組み(Global Healing Initiative)」の代表も務めています。その活動を中心に、スライドを使いながら、通訳の方のわかりやすい日本語を通して、そのメッセージが伝えられました。

パキスタンは自然豊かな国ですが、地震や洪水などの天災もあります。また、複数の民族から成り立っていて、貧しい人びとも多く、さまざまな政治、経済、社会問題を抱えています。人口のわずか2%にすぎないクリスチャンは、ほとんどがイスラム教徒の社会の中では、冷遇されることも少なくありません。保健をめぐる問題、女性に対する暴力の問題などが重なりあう中で、「パキスタンでクリスチャンとして生きる」という講演のタイトルは、一人のパキスタンのクリスチャン女性の話という意味合いをはるかに超えて、とても重い課題を私たちに投げかけてきます。そのような中にあって、「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5.9)という聖書の言葉に動かされながら、いろいろな次元での「平和の実現」のために生き続けるデワンさんの生き方には、大いに心を動かされるとともに、実にたくさんのことを教えられました。

今回の講演を受けて、学生たちはどのようなことを感じたのでしょうか。ここではとくに、翌日の1年生の「キリスト教概論」の授業において、学生たちに書いてもらった意見や感想の中から、いくつか紹介することにします。

○パキスタンでは…自然環境と貧困さが合わさり、貧しい人は洪水になりやすい場所に住まなくてはならず、洪水のために皮膚病や目の病気にかかるなど、貧富の格差が影響して二次的、三次的に困難が重なってしまっている状況を知り、胸が痛む思いでした。そのような方々に対して、ズビさん(デワンさんのニックネーム)は活動を行っていることを知りました。…少数者に対する人権侵害もかなりひどい状況で、少数者であるクリスチャンを襲撃したことに対する抗議行動もズビさんは行っていることを知り、彼女は、パキスタンが平和になるように幅広く活動支援をしていることを知りました。…現在の私たちのくらしの平和さを実感し、世界で貧しく暮らしている人へ、目を向けていかなくてはならないと思いました。(N.M)

○クリスチャンという、その国の中で「普通以外」と認識された者への差別の気持ちをなくすのは難しいのだろうか。自分の中での「普通」が隣の人の「普通」であるとは限らないという想像力を持つことで少しは緩和されないのだろうか、と思った。(M.Y)

○今、目の前には勉強するための道具があり、お腹が空けば食事ができ、喉がかわけば水を飲むことが当たり前にできます。それが当たり前すぎて、私たちはその当たり前のことに感謝する気持ちを忘れてしまっていた気がします。もっと相手に感謝し、思いやりのある生活をしなければならないと思います。そのような気持ちへの意識の低さが、ズビさんの話にもあったように、若者のボランティアへの参加への低さにつながっているのではないかと考えました。(M.K)

この講演を聞いた学生の中から、AHIのような活動への関心が少しでも深まり、新たな関係が始まることを心より願っています。　(菊地)

「創立117周年　記念行事」

■記念礼拝

2015年10月31日（土）には、柳城学院の創立117周年記念礼拝が行われました。第1部では、田中誠チャプレン司式の下、創立記念礼拝が執り行われました。

渋澤一郎理事長、新海英行学長の式辞の後、永年勤続者の渡辺敏光経理課長（勤続20年）、の表彰が行われました。第1部の最後には、2年次前期の成績上位者に贈られる特別給付奨学金の表彰が行われ、1位から9位までの計9名の学生には一人ずつ学長より表彰状と奨学金が授与されました。

第2部では、立教女学院理事長・立教女学院短期大学学長である若林一美先生が「種まく人として」と題して講話を行ってくださいました。若林先生は、わが子を亡くした親たちが集う「小さな風の会」を主催しており、そうした親たちのグリーフ・ケアも行っています。若林先生が人間を理解するために、ジャーナリストとして末期のがん患者、不治の病の方々などと関わってきた経験、小さな風の会に集う親たちの言葉を交えてお話されました。悲しみは時間によって癒されるものと、そうではなく増大していくものもあること、慰めが遺族や当事者にとってつらいものとなることがあること、数字やルールでは測れない見えないものの大切さについて考える機会をいただきました。会場の学生は皆、先生のお話に熱心に耳を傾けていました。

■墓地礼拝

同日の午後からは、名古屋市の八事霊園にある日本聖公会中部教区の共同墓地に向かい、ヤング先生をはじめとする柳城学院の関係者の前で、お祈りを捧げ、併せて献花を行いました。

（高瀬）

2015年度　礼拝予定表

		礼拝	礼拝時間帯の活動
3/26	木	始業礼拝	（教話）新海学長
4/2	木	通常礼拝	
4/8	水	通常礼拝	（教話）新海学長
4/15	水	特別礼拝（1:00～合同礼拝）	合同ゼミ説明会（1:30～）
4/22	水	通常礼拝	
5/13	水	震災ボランティア報告（1:50～合同礼拝）	専攻科説明会（1:00～）
5/20	水	通常礼拝	
5/27	水	特別礼拝（合同礼拝）	観劇会（同窓会企画）　劇団うりんこ
6/3	水	通常礼拝	
6/10	水	特別礼拝（合同礼拝）	宮嶋英一元課長講演/奨励奨学生表彰式
6/17	水	特別礼拝（合同礼拝）	観劇会（同窓会企画）　劇団うりんこ
6/24	水	通常礼拝	
7/1	水	特別礼拝（合同礼拝）	松本普さん講演「被災地の今」
7/8	水	通常礼拝	
7/15	水	通常礼拝	
7/22	水	通常礼拝（1:00～合同礼拝）	附属豊田幼稚園（サマースクール）と合同礼拝
9/2	水	通常礼拝	
9/9	水	通常礼拝	
9/16	水	特別礼拝（合同礼拝）	AJU講演会
9/30	水	特別礼拝（合同礼拝）	観劇会（愛実の会　人形劇団「紙風船」）
10/7	水	特別礼拝（合同礼拝）	ボランティア報告会
10/14	水	特別礼拝（合同礼拝）	AHI巡回報告会（ゼミ討論会用）
10/21	水	通常礼拝	日本国際ギデオン協会（聖書配布と奨励教話）
10/28	水	通常礼拝	
10/31	土	創立記念礼拝	奨励奨学生表彰式　（講演）若林一美先生（立教女学院）
11/11	水	通常礼拝	（教話）後藤香織司祭（中部教区）
12/2	水	通常礼拝	
12/4	金	ツリー点灯式（16:45～）	ミニコンサート（チャペル）（18:10～19:00）
12/9	水	特別礼拝（合同礼拝）	附属柳城幼稚園キャロリング,学生満足度調査報告会
12/16	水	クリスマス礼拝（16:30～）	
1/6	水	通常礼拝	
1/13	水	通常礼拝	（教話）尾上特任教授
3/16	水	卒業/終業礼拝	（教話）新海学長

東日本大震災復興支援ボランティア活動の報告

今年度もメリット基金の援助を受け、前期4回と夏休みを含め、東日本大震災復興支援ボランティアの準備会を行い、8月17日-20日の3泊4日の日程で現地での活動を行ってきました。活動内容としては、被災地巡礼、被災地の現状についてのレクチャー、仮設住宅での茶話会・子どもたちと遊ぼう会・夏祭り・花火大会、幼稚園・保育園での保育参加をさせていただきました。活動の詳細と感想を記します。

8月17日、朝8時頃、名古屋駅に引率教員および学生が集合し、お祈りの後、出発しました。学生は初め笑顔を見せていましたが、仙台駅へ近づくにつれ緊張している様子が伺えました。仙台駅について学生が発した第一声は、「本当にここで震災があったのか?
でした。しかし、彼らが仙台駅からレンタカーに乗り福島県相馬郡新地町にある「被災者支援センターしんち・がんご屋」に近づくにつれ、未だ復興していない町並み、海抜〇mという看板、土砂が山積みになっている現状を目の当たりにして、改めて「自分たちに何ができるか」を感じているように思いました。

その後、「支援センターしんち・がん小屋」にて、松本普さんよりレクチャーを受けました。学生は、新聞にもニュースにも掲載されていない現実や現状を聞き、胸に「震災を風化させない」と感じている様子が伺えました。次に、被災地巡礼を通じて実際に震災の現実・現状を目の当たりにして、先ほど聞いた耳からの情報と目からの情報がそれぞれの点から線に繋がり、学生も言葉をなくしていました。その日の夜、宿泊場所である「旅館かんのや」にて1日の振り返りをした際にも「言葉にできぬ思い」をそれぞれの「心」に受け止めていること様子が伺えました。

次の日、がん小屋仮設住宅で子どもたちと「遊ぼう会」を行いました。幼児から中学生まで様々な年代の子どもたちが参加してくれました。遊ぼう会では、鬼ごっこや野球、カードゲームなどを行い、一方で宿題を一生懸命に行う子どもたちがおり、学生は自然とその中に溶け込んでいました。こちらが誘導して遊びを行うのではなく、日常で行われている遊びに引き込まれる感じでした。その日の夜の学生の様子は、昨日よりも少し大人になった気がしました。

翌日は、がん小屋仮設住宅で午前中は茶話会、午後からは夏祭り・花火大会を実施しました。茶話会では、学生方は、事前に準備していた歌やレクリエーションを披露し、その後、参加者と話す機会を設けました。初めは最近あった出来事などたわいもない話から始まりましたが、心が解れはじめたころから、少しずつ震災直後の話を聞くことができました。時に涙しながら話す方、途中で言葉を失う方もおり、その様子を学生は隣でじっと聞いていて相手が話し始めるまで寄り添う姿が見受けられました。茶話会の終わりが近づき、参加者から自然と「ありがとう」という言葉をいただきました。この言葉を聞いたとき、学生方はどのように感じたでしょう。少なくとも、「私たちと出会ってくれてありがとう」と思ったのではないでしょうか。その後、夏祭りの準備を始め、スイカ割り、焼きそば、フランクフルト、白玉団子、かき氷など、多くのゲームや模擬店を行いました。子どもだけでなく保護者も参加して、すぐに完売するものもありました。差し入れに「生しらす」をもって来てくださる方もいらっしゃって、互いに心の距離が少しずつ溶け始めたように感じました。日も暮れたころ、花火大会が始まりました。手持ち花火に火をつけ、子どもたちが楽しむ中、打ち上げ花火に火をつけ火花が大きく上がった瞬間、「オゥー」という歓声があがっていました。子どもも大人も楽しんだその日のプログラムは、無事に終えることができました。

行く日までの準備期は長く感じますが、帰る日を迎えると早く感じる、と言う学生もいて、充実した日々を送った様子が伺えました。最終日は、学生も引率教員も3か所の幼稚園と保育園にわかれて、夏季保育に参加しました。その中で、学生方は

前もって準備していたシャボン玉を子どもたちと一緒に楽しみました。その後、昼食を一緒に食べる機会をいただきました。

園の子どもたちはみんな笑顔で、楽しそうにしていましたが、幼稚園・保育所の先生方は、放射能の数値をしっかりと把握しつつ遊びを行っていました。さらに、園長先生のお話を聞く中で、学生は、幼児教育・保育の一番重要なことは「子どもの命を守る」ことだと改めて感じたと思います。

以上の活動を通じて、各々が言葉では足りない何かを感じて名古屋へ帰ってきたことと思います。

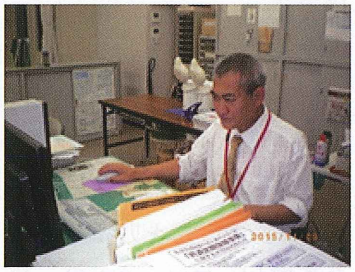
震災から早いもので4年が経過しました。その中で、大きく変わったことはなんでしょうか。

仮設住宅から移住が決まり、新たな生活を始めている人々、がれきなどが撤去され、更地になった場所、漁や農業などが再開されたことなど多くの変化が見受けられましたが、それは、目に視える形での復興であって、目に視えない復興が進んでいるのでしょうか。それは、震災を受けた人々の思いを風化させないこと、“今”現地で必要とされている復興を行うこと、そして原発避難地域の方々の長期化する仮設住宅での生活という現実だと思います。学生も引率教員も様々なことを学び、心に刻み込みました。私たちがもっとできることは何か、“今”必要とされていることは何かを再思考することが求められていると実感しました。（水落）

教職員の言葉

名古屋柳城短期大学の学生の皆様へ

名古屋柳城短期大学　総務課　中村　雅



皆様は、名古屋柳城短期大学へ入学された時に、本学はキリスト教の精神に基づいて教育を行うということをお聴きになったと思います。また授業でもキリスト教概論等を受講されているかと思います。さて、それではキリスト教の精神とは何でしょうか。

話は変わって、フランスやドイツと云えばワインですね。フランスワインでオスピス・ド・ボーヌと云えばブルゴーニュの名品、ドイツワインでビュルガー・シュピタールと云えばフランケン地方のヴェルツェブルグの名品ですね。ところで、オスピス（hospes）、シュピタール（spital）ですが、フランス語とドイツ語の違いはあれ、どちらも同じ意味の言葉です。もとはラテン語のホスピチウム（hospitium）“よそ者を迎え入れる場所”です。そのもとは旅館を意味するギリシャ語のクセノドキア（xenodocheia）で、人種、宗教、国籍を問わず無料で宿泊させ、食事を与え、病人の介護をした施設を意味します。この施設は初期のキリスト教の人々が始めたもので、中世頃にヨーロッパで同じような施設を市民やお金持ちの人たちが寄付で、全ての人々に役立つことを目的に建設したものです。この施設に入れる条件は、貧困であることだけと云われています。このオスピス/シュピタールが活動を続けるために収入源としたのが葡萄の栽培によるワイン造りでした。その一つでドイツのロ―テンブルグにヨハネ騎士団と云う修道会が作ったシュピタールがあります。当初は街の一角であったものを1280年に新しく大きなものに造り変えました。町を囲む城壁の門の一つであるシュピタール門の上に、次の言葉が記されています。

Pax（パークス）　intrantibus（イントラティブス）　Salus（サルース）　exeutibus（エクセンティブス）

「訪れる者には安らぎを、去りゆく者には幸いを」これは聖書の言葉ではありませんが、無料で、人種、宗教、国籍を問わず弱者に寄り沿い、全ての人々の役に立つことを行うことはキリスト教の精神の一つであると思います。そしてこの言葉の最後にBenedicto　habitantibus（住まう者には祝福を）を付け加え、名古屋柳城短期大学を訪れ（入学し）、住み（在籍し）、そして去られる（卒業する）皆様へ送ります。終わり。

“馬鹿爺さん”に魅せられて

名古屋柳城短期大学　特任教授　尾上明子

保育にかかわる方々にはよく知られたフリードリッヒ・フレーベル、この人物には過去も現在も多くの人々が惹きつけられているようです。現在のドイツでも、ペスタロッチー・フレーベルは、けっして過去の人ではなく、今も、盛んに研究や実践がされているということです。それほど、大きな存在であるといっていいでしょう。

フレーベルの没年(1852)3年前に出会った女性、マーレンホルツ・ビューロー夫人は、「教育の原点～回想のフレーベル～」の冒頭に、最初の出会いを次のように記憶しています。

彼女は毎年のようにチューリンゲンのリーベンシュタイン温泉で保養をしていたのですが、到着してすぐ、宿の主人に何か変わったことはないかと尋ねました。主人によると2・3週間前に一人の老人がこの村に来て、村の子どもたちと歌ったり踊ったりしているので、彼は村の人から“*馬鹿爺さん*”と呼ばれているとのこと。夫人は、数日後、偶然、この老人に出会いました。老人は、背が高く、痩せ気味、長い白髪で、3歳から8歳位の村の子どもたちを連れていたのですが、ほとんどの子どもたちが、裸足でみすぼらしい服を着ていました。彼は、子どもたちを遊戯の体形にし、歌ったり踊ったりしていたのですが、その愛情に満ちた、辛抱強そうなまなざしや子どもたちがいろいろな遊戯をしている時の彼の態度があまりにも感激的で、見ていて涙があふれそうになったといいます。夫人は、一緒にいた友人に「この人が、村の人々から“*馬鹿爺さん*”と呼ばれている人ですね。しかし、この人は同時代の人々から、馬鹿にされ、さげすまれるかもしれませんが、後世の人々からは、必ず記念碑をたてられるような人かもしれません」と言いました。マーレンホルツ・ビューロー夫人は、フレーベルに挨拶し、その後、その考えに驚嘆し、熱心に学ぶようになり、フレーベルの死後、ヨーロッパの多くの国に彼の思想や理念、キンダーガルテンの設立を訴え、広めていった第一の使徒となるのです。彼女の働きがなければ、これほど早く世界にキンダーガルテンが普及することはなかったといっても過言ではありません。

何かの馬鹿になる、これほど、素敵な姿があるでしょうか?よくフレーベルの文章は、難解過ぎるという声を聞きます。しかし、彼は、けっして頭でっかちでは、ありませんでした。それまで、男性の職業であった教師という職業を女性の職業としても広げ、子どものための創造的な遊具、積木や砂・粘土などに着目し、遊戯、歌や動作を伴った遊び、今日の“森の幼稚園”の思想の原点である自然の中で子どもを育むこと、生活に密着した作業、など多岐にわたる保育(教育)内容を提示し実践しました。

物事を馬鹿になるほど熱中し、深め、人々のために尽くす、本当に美しい姿です。素敵なことですが、なかなかできるものではありません。私は、かつてフレーベルのゆかりの地を訪ねたとき、ゆかりの地のあちこちにビューロー夫人が予言した通り、第二遊具(恩物)を象った記念碑が建てられているのを見、また、地域の子どもたちが、訪問者の「この人は誰?」との質問に、“子どものお友だち”と即座に応えたことを知り深く感動したことを覚えています。フレーベルに魅せられた一人として、もっともっとフレーベルに近づいていきたいと切に願うこの頃です。

柳城を創設してくださったヤング先生はじめ、多くの宣教師の方々には、日本と日本人をこよなく愛してくださいました。有名無名のフレーベルのような方々がおられたからこそ、私たちの学校が今、存在しているのです。キリスト教を基盤とし、フレーベルの保育によって始められたことを今一度想い越し、原点に立ち返るとともに、彼の広く深い思想と方法を現代に生かす研究が行われますことを願ってやみません。

2015年12月16日発行　第28号
発行所　名古屋柳城短期大学
名古屋市昭和区明月町2-54
編集兼発行者　キリスト教センター
印刷所　日興商会